

タイトル	中国人日本語学習者の共感的言語行動 -日本語母語話者との会話データから比較して-
著者名(所属)	山本 裕子 (愛知淑徳大学)
連絡先 Eメール	hirokoy@asu.aasa.ac.jp
<p>論文内容</p> <p>(研究の目的) 日中の会話スタイルが異なることにはこれまでに多くの指摘がある(楊 2015 他)。本発表では対人関係の異なる中国人日本語学習者(以下 CS)と日本語母語話者(以下 NS)の会話データからそれぞれに特徴的な表現を抽出し、それを手掛かりに会話の中でそれぞれが「親しさ」をどのように表しているかを検討した結果の一部を報告する。</p> <p>(研究方法) 上級 CS 5 名を対象に、初対面の大学生同士の会話(以下、「初対面」と友人の大学生との会話(以下、「友人」)データを採取した(各 30 分 x 合計 10 組分)。 この会話データを文字化し、形態素解析を行い、形態素 N-gram を用いて頻用される表現を求めた。特定の発話行為に着目するのではなく、談話全体から特徴を見出したいと考えたため、形態素 N-gram を活用することとした。形態素 N-gram を得るには、オリジナルの分析ツールである Co-Chu を使用した。 調査は、まず形態素 N-gram (2-gram から 4-gram まで)から特徴を抽出した。その後、この結果に基づいて CS 5 名に半構造化インタビューを行なうという 2 段階で行なった。</p> <p>(結果) 形態素 N-gram を見たところ、NS は「初対面」と「友人」のどちらにおいても「うんうん(「うんうんうん」等も含む)と「そうなんだ」を高頻度で用いているが、CS は「うんうん」と「そうそう(「そうそうそう」等も含む)」を用いていた。また、NS は「初対面」と「友人」で終助詞の用い方が異なるが、CS は終助詞を含む組み合わせの使用が少なく、また「初対面」「友人」のどちらにおいても「ね」を多用する傾向があった。 この結果を踏まえ、CS に相づちおよび終助詞の使用に関して、学習経験、理解、使用意識等について半構造化インタビューを行った。CS は「そうそう」や「ね」を用いることで相手への好意や共感を示すことができると認識しており、これらの多用は、CS にとって相手に接近を図る戦略の一つと考えられることがわかった。 先行研究で指摘されているように、本研究においても CS は独自の共感的言語行動観を形成していることが示唆された。また、CS は NS が多用する「そうなんだ」を必ずしも良い印象で受け取っているわけではない。以上のことから「共感」や「同意」をどのように実現するかだけでなく、それらをどのように捉えるか、背後にある「共感」に対する捉え方にも注目する必要性があると考えられる。</p> <p>参考文献 山内博之(2004)「語彙習得研究の方法 -茶筌と N グラム統計-」『第二言語としての日本語の習得研究』7 号, pp. 141-161. 第二言語習得研究会. 楊虹(2015)「初対面会話における話題上の聞き手行動の日中比較」『日本語教育』162 号, pp. 66-81. 日本語教育学会.</p>	